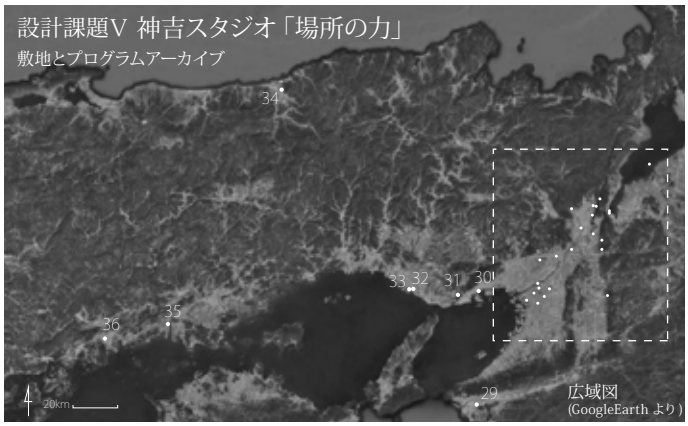
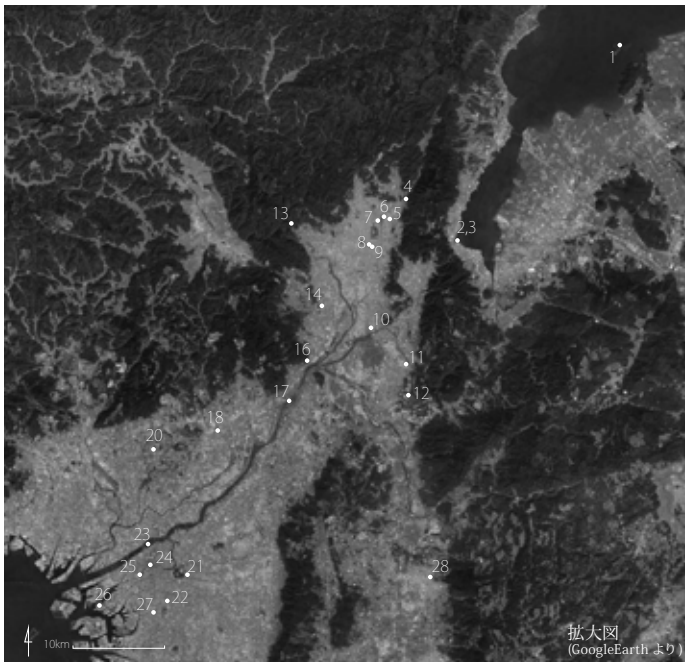
神吉研究室プロジェクト

Projects of Kanki Lab.





1	沖島	artist in residence	2017 倭昂司
2	浜大津	湖岸,湖上環境再生	2012 小山実苗
3	〃	湖岸再生と図書館complex	2019 高山夏奈
4	修学院	都市居住者のための離れ	2018 中村文彦
5	田中	collective house	2014 竹内和巳
6	養生市営団地	改良住宅団地オープンスペース再考	2017 浅田英亮
7	出町	複合公共施設	2018 新靖雄
8	烏丸蛸薬師	第三の場所と滞在機能	2019 佐古田晃朗
9	中京区	集合住宅	2013 南明日香
10	中書島	子供の遊び場を孕む地域の溜まり場	2014 山口直人
11	宇治	仮設空中歩道	2016 潮田紘樹
12	東城陽GC	ゴルフ場の環境再生	2015 吹抜祥平
13	嵯峨鳥居本	子供のための自然学習場	2016 角谷遊野
14	向日町競輪場	「すきまあそび」	2011 竹田美里
15	〃	「たて×よこのむこう」	2011 田中由乃
16	大山崎町天王山	子供のための施設	2013 中原祐亮
17	鵜殿のヨシ原	小学校	2019 雨宮美夏
18	茨木市上泉町	「ぬけみち都市」	2011 山川健太
19	〃	Memorial Memoirs	2011 木村公翼
20	千里ニュータウン	納骨堂と火葬場	2015 山本雄志
21	城東区森ノ宮団地	集合住宅	2013 田中哲
22	天王寺区夕陽ヶ丘	集合住宅	2016 伊藤純一
23	中津	高架上テナントビル	2015 林和希
24	中之島	sports complex & runnning course	2019 奥村拓哉
25	安治川沿岸	歩行者専用の橋	2017 山地崇博
26	大阪築港	住友レンガ建築群と中学校	2012 波多野あゆみ
27	西成区萩之茶屋	シェルターと納骨堂	2017 大橋茉利奈
28	奈良市椿井町	保育園	2016 原泉
29	みその商店街	保育園と農園を中心とした地域の場	2017 鈴木保澄
30	三宮駅	駅の建て替え	2014 田寺司
31	江井ヶ島皿池	遊歩道,マーケット,池水の攪拌機構	2016 作田隆之
32	長田区長田山麓	「石の記憶」	2011 田窪成貴
33	高尾台ニュータウン		2011 大田章雄
34	鳥取市	宿泊施設	2014 成原隆訓
35	倉敷市玉島	水辺の劇場	2018 中村友彦
36	福山城	駅の再生	2013 宮地茉莉

スタジオ課題「場所の力」敷地見学
大阪淀川・鵜殿のヨシ原にて
（写真：新 靖雄）

「場所の力」に向き合うことを通して

助教　太田裕通

本学の４回生は卒業設計の前に、教員毎に異なるテーマが設けられているスタジオ制課題に取り組む。約２ヶ月半のタフな演習である。開講以来、神吉スタジオの課題は「場所の力」である。課題文にはこう書いてある。

「これまでにない変化をみせる現代の都市・地域で、どのようなランドスケープが受け継がれ創造され得るだろうか。新しいランドスケープにむかうために、場所に潜む力を読み、その力を顕在化させる建築と都市・地域空間の提案をめざす」。

敷地・テーマは自ら考えて欲しいというメッセージと共に、唯一の条件が「全員参加でそれぞれの現地調査に赴くため、敷地は京都から日帰り可能圏内、自由に選択する」ということである。その結果この８年で図のような30以上の場所が選ばれ、空間提案がされてきた。敷地の選び方は以前から関心があった場所を選ぶ者、偶然場所を発見する者と様々である。

卒業設計では「空間の構想力」や「緻密な図面を引くこと」は勿論、「敷地の選び方」と「その地におけるテーマ・枠組みの設け方」が問われると思われるが、それは本課題も同様である。特に場所に対しての気付きや発見から、自分なりの価値付けや捉え方を言葉や図を駆使してまとめ上げるところが鍵になってくる。最終的な提案では、都市・地域の実空間に対して新しい価値の捉え方を空間的表現、すなわち一つの形に決定する事を通して提示するという難しいハードルを超えなければいけない。

課題が始まって最初は誰しも困る。場所へ赴いてさあ、どうしようと。約２ヶ月、修士１年と教員とで一緒に考える。この対話（エスキス）の時間こそ重要で、毎回４回生が持ってきてくれる思考の触媒に触れ、参加者全員に学びがある。また本人の場所に対する生の感覚は、他の者にとって現地に赴いて話し合ってこそやはり腑に落ちることが多い。その為全員で場所へ赴く日を設ける（だからこその日帰りである）。濃密な対話を繰り返す中で本人が自らつくり上げていくテーマは当然非常にバリエーションに富み、面白い。そのまま卒業設計、さらに修士研究のテーマとなる者もいる。つまりここで学んでいる事は、設計や研究、都市・地域に関わる活動において必要な「場所の力」への「構え」である。それは言葉で理解するというよりも、神吉研での経験を通して身体で体得していくある種必修技能といえるだろう。

次ページ以降のプロジェクトでもこの「構え」は一貫している。それぞれの表現から「場所の力」を感じ取って頂きたい。

写真 1) カンポン・アクアリウムから臨む海の景色

カンポン・アクアリウムにおけるフィールドスクール

修士課程 2 回生　小坂知世、修士課程 1 回生　大橋茉利奈

2016 年 4 月、ジャカルタの「カンポン・アクアリウム」*(以下 K.A.) という超密集市街地が州政府による強制撤去に遭った。ある日の早朝から始まった約 1 ha・230 軒におよぶ撤去はその日の夕方には完了、K.A. は更地となり、約 710 人が一日にして家を失った。

カンポン（kampung）とは、インドネシア語でムラという意味の言葉。ジャカルタには「都市カンポン」が点在しており、カンポンは自然発生的に形成される超高密な居住環境からしばしばスラムだと思われがちだが、実態は隣組制度や相互扶助のシステムを持つれっきとしたコミュニティである。また路地にブルーシートの「セルフビルド庇」がせり出したり、木にたくさんの鳥かごが吊り下げられていたりと、環境を自らのモノにする「住みこなし力」を至る所で感じることができる。

州政府の体制が変わり 2018 年 3 月には仮設シェルターが建設された。シェルターそのものは簡素だが、壁の増設や軒下への溢れ出しなどに見られる住民の「住みこなし力」は今でも健在である。

現在ジャカルタの都市・建築コンサルタント集団である Rujak を筆頭に、住民のためのボトムアップ的な再建が動き出している。2018 年 9 月には Rujak と神吉研究室で K.A. にてインターナショナルフィールドスクールを開催した。

参加者は K.A. の住民、Rujak のスタッフ、日本学生、一般参加など合計 20 人であった。各グループに K.A. の住民、日本からの参加者が必ず加わるように 4 チームに分かれた。最終日の K.A. 住民達へ向けたプレゼンテーションを目標に、近隣のカンポンのフィールドワークや関係者によるレクチャーが 6 日間行われた。

プレゼンテーションのテーマは与えられず、各チームがテーマを自分達で設定した。テーマ決定に主催者側の意向が介入することはなく、参加者達が現地で肌で感じたことや問題意識をテーマにすることができた。

チームでは K.A. の内部の人間と外部の人間が一緒に議論し、協働した。外部の人間である私達は内部の人からカンポンに住むことの意味を学び、現実の問題に触れることができる。外部から来た私達も与えられるだけではない。外の人間から見たカンポンにある無数の魅力－カンポンを取り囲む海の風景、路地に現れる露店空間、お手製の庇の下での井戸端会議－それらを言葉にすることで K.A. 住民達は自分達の故郷の魅力と問題点に自覚的になっていくことができる。

最終プレゼンテーションではアイデアをデザインや図で示し、インドネシア語で住民達に発表を行った。かたちになったアイデアを見ると住民達も意見を出しやすくなる。そこで気になる箇所に付箋を貼ってコメントをしてもらい、住民達の興味がどこにあるのか、どんな意見持っているのか、を可視化することができた。

2019 年 9 月には第 2 回フィールドスクールが行われる。撤去から 3 年が経ち、シェルターから恒久的な住居の着工準備が進む複雑な情勢の中、私達は住民達と一緒にこの地に未来を描きにいきたい。

＊ジャカルタ北部スンダクラパ港付近に位置するカンポン・アクアリウムは、古くから続く海を望む漁村である。またインドネシアがオランダ植民地だった時代、ジャカルタは東インド会社の重要な貿易拠点だったため、カンポン・アクアリウム周辺の旧市街地には現在でもオランダ近代建築が遺っている。撤去当時のジャカルタ州政府はオランダ近代建築に関連した観光地整備計画を掲げ、土地の不法占拠を理由にカンポン・アクアリウムを含む周辺カンポンの強制撤去を断行したのだ。

写真 2) 撤去直後の様子

写真 3) 従来のカンポンの様子

写真 4) 現在の K.A. シェルターの様子

写真 5) プレゼンテーションの様子

2018 年 11 月には太田によるダイアログ手法での K.A. 調査を行い、より解像度の高い撤去前後の住民 1 人 1 人の主観的な思い出や意見を聞き出すことができた。

写真１) 大岩の風景。写っているエリア（風致地区）では以前までの事業所群は撤去され資材置き場となっている。
写真左奥の約 40m にも及ぶ産業廃棄物の山（通称：『岡田山』）は、地元事業者によって 20 年かけて撤去される。

写真２) トラックの往来で凹んだ路面は雨天時には川のようになってしまう

写真３) 畑や事業所群越しに稲荷山を望む

写真４) 数年前まで竹藪だった鎮守池周辺は整備され、広大なオープンスペースに

違法開発地における祝祭の場づくり

博士後期課程３回生　清山陽平

・大岩についての概要

大岩街道周辺地域(以下､大岩)は京都市伏見区にある｢違法開発集積地域｣である。違法開発といっても、違法であることをよく知らぬままに土地を購入し生活する人も多い。また市内の産廃処理を支える静脈産業等の事業者には余所に移ってまで事業を継続することが困難なものも少なくなく、結果的に他での同様の違法開発を招きかねない危惧からも、強制撤去は現実的ではない。公金投入も難しい中、住民や事業者が主体となった環境改善を含めたまちづくりによる是正が進められている。

神吉研究室ではこれまで、２名の学生が大岩を対象に修士研究に取り組んだ [1)2)]。今年度は筆者を含む院生数名が一部エリアにおける整備計画の立案に向けた住民ヒアリングや、試提案の作成を行うことになっている。

・大岩でのここ数年の動き

大岩には数年前から龍谷大学の学生が入り、コミュニティ活性化に向けた活動を継続的に行っている。最近では国外の大学の訪問や WS 開催も多い。また京都市深草支所職員は、鎮守池周辺（市所有地）の整備等を地元事業者の協力を得ながら進め、環境改善を率先している。これらの活動もあり、数年前と比べても市職員や外国人、学生を含む外の人が歩いていても、特段珍しくない雰囲気になってきている。

・大岩のこれからに向けて

2019 年 11 月 30 日 (土) には整備された鎮守池周辺にて深草支所や龍谷大学、住民らの協力による、地元野菜を用いた収穫＋食事祭が開催される。昨年までは地元向けの小規模なものであったが、今年は同日に行われる大岩山の一斉清掃の打上げも兼ね、一般参加者も含め百人規模となる見込みである（｢大岩がきれいになる日（仮)｣)。これに合わせ神吉研究室では、以前和知駅前で行った布屋根による休憩空間 [3)] をより拡張し制作する予定である。参加者の労をねぎらいながら、大岩全体にとっても祝祭性を感じられる場づくりができればと思う。また建築物でも工作物でもない布屋根は、調整区域内でも常設できる可能性がある。夏の酷暑には日陰が恋しくなる大岩における、住民や来街者の合法的な居場所づくりのトライアルともしたい。

美観とは言い難いかもしれないが、高さ数十mにも及ぶゴミ山や事業所、住宅群、稲荷山裾の地形やきれいな湧水､竹等の植生やこまごまとした畑の中を､大型トラックと自家用車が往来する大岩の風景は独特である。一筋縄ではいかない合法化への道のりを、いろいろな人に今よりもいくらか愛される風景、地域づくりの過程として、それ自体を楽しみながら進んでいければ素晴らしいと思う。｢大岩がきれいになる日｣は単発的なイベントだが、これから続く大岩のそう悪くない将来を、みんなが薄布に透かし見るような一日としたい。

１) 中原裕亮「市街化調整区域の違法開発集積地域における土地利用設計に関する研究―京都市「大岩街道周辺地域」を事例としてー」京都大学修士論文 2016
２) 吹抜祥平「違法開発集積地域における改善事業可能性から見た主体設計に関する研究―京都市「大岩街道周辺地域」を事例としてー」京都大学修士論文 2018
３) 参考：traverse17

写真 1) 駅前広場から改修後の JR 和知駅舎を眺める

和知駅プロジェクト、その後。

博士後期課程 3 回生　清山陽平

2017 年 4 月、JR 山陰本線和知駅の駅舎改修が完了した。

これまで本プロジェクトの概要や改修までの過程 [1)2)]、また具体的な改修内容 [3)4)] については紹介してきた。本稿では改修から約 2 年半が過ぎた和知駅の「その後」を、月一回ほどの頻度で和知に帰省する筆者の目線から紹介しようと思う。

駅内喫茶「山ゆり」の営業は続いている。改修では駅前広場や商店街奥の山々を見渡せるカウンターや、ホームと同じレベルで一時間に一本の電車を眺められるソファ席を設けたが、常連客はこうした新しい席をほとんど利用していないようだ。それでも座席数の増加は午前のラッシュ時を中心に役立っているらしい。常連客以外のお客さんには新しい座席を選ぶ人が多く、薄水色に明るくなった喫茶内の雰囲気とともに気に入られているらしい。

改修以前から「山ゆり」は、高齢者を中心とした数十人の地元常連客による、ほとんど毎日の貴重な溜まり場となっていた。若者など新しいお客さんが入りやすくするのと同時に、現状の環境を大きく変えてしまわないというのが改修の肝であった。常連客のとあるおじいさん（筆者のご近所さん）は、改修直後には雰囲気の変化から足が遠のいたようだったが、最近では以前同様、昼間から赤ら顔でおしゃべりする姿をよく見かける。このおじいさんの他にも、以前からの常連客はほぼ変わらずに「山ゆり」を利用してくれているようで、一安心である。

喫茶内に新設した棚には住民提供の本や写真、手作りの小物がぎっしりと飾られ、学生がデザインした喫茶店の新しいメニュー表も使われ続けている。筆者がコーヒーを飲みに行くと、店員さんもお客さんも和やかに、昔のまちの様子を教えてくれたりもする。そのうちに別の常連客が立ち替りで入ってきて、また別の話をしてくれて、というようなのが毎度の感じである。

駅舎前に新設した少し変わった形のウッドデッキは、改修直後から早速住民によるカラオケ大会のステージに、また夏祭りでは多くの人が腰を落ち着ける場所に使われていた。日常的にも電車で帰ってきた高校生が親の迎えを待つ姿が見られる。駅舎内の小さな待合室でも、改修した腰掛けには直後から手作りの座布団が置かれ、以前より広々とした室内にはのんびり電車を待つおばあちゃんの姿がある。

筆者のいた頃は 30 人であった地元小学校の一学年の児童数は、最近では数名にまで減ったらしい。筆者の同級生でも、地元に残っているのは数名だ。子どもも大人も少なくなる中、住民のささやかな日常が駅前にある大切さを改めて感じる。筆者は幼少期より和知に育ったネイティブだが、一家としては 20 年ほど前に越してきた余所の人である。そんな立場から疎住の農村地域における唯一中心的な場所を設計することには不安もあったが、最近では子どもの頃から続く、何気なくかけがえのない風景を継げたような気もしている。

写真 2) 駅内喫茶「山ゆり」のある夕方

写真 3) 多くの人がウッドデッキに腰掛け憩う夏祭りの風景

写真 4) 改修後さっそく座布団が置かれた駅待合室

1) 清山陽平「和知駅プロジェクト」traverse17 2016.10
2) 清山陽平、神吉紀世子他「駅再生プロジェクト　地方におけるこれからの「駅」の役割」日本建築学会大会デザイン発表梗概集（九州）2016.08
3) 吹抜祥平、清山陽平他「小さなまちの拠点 和知駅待合空間改修プロジェクト」日本建築学会大会建築デザイン発表梗概集（中国）2017.08
4) 清山陽平、神吉紀世子「小さな駅を中心とした地域持続性への設計―JR 山陰本線和知駅における待合空間改修」都市計画、都市計画学会 2017.07

現存する西陣小と、
過去 4 回で実現した活用の様子

元西陣小学校活用プロジェクト 2 『西陣ベースメント TRIAL』

博士後期課程 3 回生　山口直人

・京都市学校跡地活用問題

京都市の小学校は明治 2 年に全国に先駆け建設された。普通教育だけでなく学区単位の自治のための空間として設計されており、地元の自治活動は少子化に伴い廃校となった後も小学校を拠点に行われている。そのため、学校機能を失ったからといって、安易に解体してよい空間ではない。小学校跡地の所有者である京都市は、その活用を推進している。ここ数年でいくつかの学校跡地活用に民間業者が参入したが、従来通りの地元住民の自治を尊重した活用案の提言は簡単ではない。

・地元住民主導の学校跡地活用検討を目指して

神吉研究室の学生が西陣地域住民福祉協議会による学校跡地活用委員会に参与して 7 年になる。京都大学学生メンバーは、「西陣ベースメント」を跡地活用の 1 つの検討材料として提案したその翌年、平成 28 年度から、西陣ベースメント TRIAL と題した空間体験型活用実験イベントを企画・運営している。

「西陣ベースメント」は次の 4 つのコンセプトを持つ提案である。①現校舎は基本耐震補強、補修をして活用、②地元の利用を継続させた展開へ挑戦、③「小学校」としての空間に価値を置いた最小限の内装改修、④「学び」を基本とした教室単位の多様な使われ方。西陣ベースメント TRIAL の目的は、学校跡地活用委員会の活動や「西陣ベースメント」の考え方を、普段お話しできない地元住民の方々に向けて検討材料として発信し対話する場をつくることである。元西陣小学校の教室棟を会場とし各教室の設えを実際に変化させることで、「西陣ベースメント」で述べるところの教室棟の多様なモザイク的活用イメージの、体験を通した共有を図っている。

・西陣ベースメント TRIAL の成果

西陣ベースメント TRIAL は昨年度 4 回目を迎えた。継続的に実施する中で、教室の様々な活用イメージを実現することができている。地元住民をはじめ、京都市内外の関心のある方々、ドイツドルトムント工科大学、バンコクタマサート大学の教員・学生と跡地活用問題を共有し合う上で、実際の建築を会場としていること、各教室の設えを実際に変化させることは効果的にはたらいている。

西陣ベースメント TRIAL#4 では、敷地内隣接の本館や教室棟他教室の地元利用、グラウンドの少年野球利用等が会期と重なり、個々の教室単位に留まらない敷地スケールの活用イメージを垣間見ることもできた。

・おわりに

これらイベントは発信力があるため、跡地活用委員会の活動として大事なものとなりつつある。一方で、学校跡地活用委員会の主な活動は、定期的に積み重ねられている議論の場にこそある。今年度に入り、一部の役員に留まらない地元住民の積極的な会議への参加も見られるようになった。元西陣小の将来を考える地元住民の輪も広がりつつあり、これからの展開に目が離せない。

かろんのうつろひ　- 太秦の気配 -

修士課程２回生　成原隆訓

我が屋戸のいささ群竹ふく風の音のかそけきこの夕へかも（家持）

竹垣の足元に今年も乾いた笹が茂る。盆になるとこれを刈る。私は今、築 50 年ほどの木造二階建の離れに住んでいる。枯淡な民家で、土地柄付近での映画撮影をしばしば目にする。すぐ側を線路が通り、毎朝踏切の音とともに起床する。夜には電車の光が差し込み、漆喰の壁に木の影をつくる。春に見事な桜が咲く庭のある築 60 年の母屋には、大家のお母さんが住まれ、灯りが点くたび気配が感じられたが、昨冬に亡くなった。私たちを心配してくれ、料理の仕方も教わった。生活の知識を書き残すことなく人が世を去る所に居合わせ、日々失われる言葉を思い途方もない虚空を垣間見た。近頃は息子で建築家の E さんと手入れについて話す。

ともに暮らすのは同期２人と四回生１人､そして私の４人だ。定員は３人なので、僕の部屋を間仕切ったのが最近の面白い変化である。仕切りはベニヤで、さながら寝殿造の室礼のように、存在は容易に感じ取られプライベートはあまりない。然し乍ら、これから先どこに住むにせよ、この細やかな緊張に身をおくことはないだろう。これも貴重な気配だ。僕の入居時の同居人は留学で退去し、一階に女の子が住んだ時期もある。集まって中二階で飲んでいると、帰宅した住人が加わり宴会になる。人が集い、離れて今日もかろんに気配が蓄積される。私は未だ立ち止まり、しばしその溜りを見つめることになりそうである。

きよやまちやをめぐる縁

修士課程４回生　久保田匠慶

今、僕は研究の為にニューヨークを訪れている。ブルックリンの工場や倉庫の利活用を調べ歩く中で、前々回の渡米から帰国した時のことをふと思い出した。

2017 年３月、研究室に NY 土産を持っていった帰り、ひょんなことから同期の清山の住む「きよやまちや」でのパーティに飛び入り参加した。その縁から、度々この町家で行われるイベントに足を運ぶようになった。１年後、留学前半年間の住まいに困っていた折、空いていた離れに住まわせてもらうこととなった。そして留学後の現在も離れに暮らしている。

庭の掃除や共通の友人の訪問時以外は各自で自由に暮らす、淡白な共同生活であるが、常にお互いの在非は感じられる透明性がある。ミセの間の扉を開け放し、通りの喧騒を感じながら過ごすのが心地良いため、在宅時は大抵ここにいる。しばしば、清山と歓談するのもここだ。

この町家で出会った友人が結婚した際には、皆でミセの間でお祝いをした。「きよやまちや」を積極的に開いていこうとする家主の気構え 1) がこのような不思議な縁を紡ぐのであろう。ミセの間よろしく、元倉庫であるカフェの大きく開かれたシャッター越しに街を眺めながらそんなことを考え、ここで筆を擱くことにする。

通りから覗き覗かれの普段のミセの間 1)

結婚を祝う会では共通の友人がつくったものをミセの間で売ったり、新郎新婦の紹介映像の上映を行った。

1) 清山陽平「現代（いま）、町家に住むということ」traverse17 2016.10